

『臨海墓誌集録』所収史料から見た新出宋元墓誌の史料特性

森田 憲司

筆者は、石刻の中でも墓誌への関心を最近強くしている。それは、石刻の史料として持つ特性を、墓誌がとくに強く有していると感じるからである。本稿では、最近刊行された『臨海墓誌集録』（馬曙明、任林豪編 宗教文化出版社 2002）を手がかりとして、この問題について述べてみたいと考える。本書には、浙江省臨海市で出土した墓誌が、南宋 54 件（北宋以前のもの無し）、元 6 件、明 53 件、清 1 件、収録され、それぞれについて、改行箇所を明示した録文（簡体字）を掲載するほか、法量、字数、「発見」の経緯などについての注記があり、一部内容に言及する注記もある。ただし、拓影は 1 枚も掲載されていない（強いていえば、趙汝适の墓誌が表紙に使われているのみ）。注記を見ていくと、これらの墓誌は、近年に「発見」されたもので、多くは臨海市の博物館にある東湖碑林に集められているようである⁽¹⁾。ここでは、同書所収の南宋時代の石刻について、「臨海出土墓誌所収墓誌一覧」と題した表を作成し、文末に掲載しておいたので、適宜参照していただきたい。以下で個々の石刻に言及する必要がある場合は、この表の番号によって表示することとする。

さて、石刻史料の特性として、同時代性、個別性という 2 つの要素を、筆者はこれまでから指摘してきた。同時代性とは、石刻史料は原則としてそこに文字が刻された時点、あるいは立石された（墓誌の場合は埋蔵された）時点で、その内容が固定されることである。もちろん例外はいくらでも存在するが、これは編纂史料が大部分を占める中国史の史料の中では貴重な特性である。また、大部分の石刻が、個別問題に関して、しかもその現場で、作成されたものであることは、中央で、あるいは地方の官衙で整理された史料が主となりがちな中国史史料の中では、この点も珍しい。

そして、そこにもう 1 つ、「伝存の偶然性」を付け加えることができるのではないだろうか。言うまでもないことだが、公私の機会にそれを文字にして石に刻するという営為は、中国の歴史の中で連綿と繰り返されてきた。もしそのすべてが現存しているとすれば、どのような景観になるのか想像すらできない。人が文字を石に刻するのは、そのことによって永遠に残ることを期待しての営みではあるが、現実には古代以来無数に営造された石刻のうちで、今日にその情報が伝わるものはきわめてわずかであることは、言うまでもない。さらに、大躍進や文化大革命、さらには近年の経済開発という経過の中で、清朝民国時代の石刻関係書に所収の石刻ですら、現存しないものが圧倒的多数である。筆者は、現在拓影を見ることのできる元代石刻の調査、目録化の作業を進行させており、公刊を予定しているが、その数は概数で 1,000 件強である。元を約 130 年として、1 年あたり 7 から 8 件、おそらくは 10 件には達しないであろう。これを多いと思うか少ないと思うかはさておき、その中にも原石はすでにこの世にないものも多からうから、石に文字を刻して後世に残そうとした営みの名残りとしては、

⁽¹⁾ 『臨海文物志』（文物出版社 2005）の「臨海文物、博物館大事記」によれば、臨海県博物館展覧庁と東湖碑林が 1995 年 9 月に完成したとあり、これらの石刻類はそこに集められているようである。なお、同書には、不鮮明ながら拓影が数点掲載されている。

その残存の割合の低さを改めて思わざるをえない。1つ1つの石刻が今日にまで生き残ることができたについては、撰文、書丹、篆額にあたった人物や、石刻の記述する内容といった、選別の対象となるものによって残されてきたものも少なくなかろうが、立地、大きさといった、内容よりは偶然的な要素がかかわっていることの方が多いのではないだろうか。ただし、拓本の場合は鑑賞という要素が入るから、選別による伝存の度合いは高くなるし、石刻が石刻書に収録されるにあたっては、編者による選抜がおこなわれているであろうことは、言うまでもない。

すべての史料は時間の中で選別を経てきている。ではなぜ石刻についてだけ、その「残り方」を問題にするのか。前に述べたように、中国においては史料のほとんどは編纂物であり、書物の形を成すまでにすでに原史料から幾度かのフィルターを経ており、さらにその書物が伝存する過程での選別も経ている。石刻史料と同じ性格の内容を持つ史料群である文集所収の碑記墓銘の類においても、撰者自身の事後の推敲は言うまでもなく、その文章が文集に収録される段階での選別があり（文集未収の碑誌が石刻で見出されるのは珍しくない）、その文集が今日に伝わるのは、さらに時代の選別を経た結果である。これを上で書いた石刻が残るための要素と比べると、石刻とくに原石の残存については、書物の形で残された史料よりは偶然性が高いと言えよう。

そして、存在の偶然性という点において、墓誌は石刻の中でも独自の位置を占めている。それは、墓誌が埋蔵を目的として作られるのに対し、碑（かりに墓誌以外の石刻を一括してこう呼んでおく）は、公示のために立てられる。したがって、碑は絶えず外部からの災厄にさらされている。これに対し、過去においても今日においても、墓誌の出現は開発などともなう偶然的出土が大部分を占める（もちろん盗掘による発見も無視できないが、これも対象選択の偶然性という点では同じである）。前述したように、『臨海墓誌集録』には所収の墓誌が出現した経緯が注記されており、表になるべく本書の表現に忠実に要約しておいたので参照していただきたいが、それによれば、一部の墓誌が後裔によって所蔵されていたのを除けば、工事などの際に発見されたか、民間に蔵されていたかが、ほとんどである。後者も文物としての所蔵ではなく、石材（門、柱の礎石、洗濯板、蓋などなど）としての使用のためであることは想像に難くない。ということは、これらの墓誌の現存は、上に書いたような伝世の石刻以上に、特段の選別を経ることのない、偶然の産物であるということができるのである。残念ながら、『新中国出土墓誌』をはじめとして、多くの石刻史料集では出土地は書かれていてもその経緯は書かれていないが、それらに所収の墓誌でも、事は同様であろう⁽²⁾。

これを言い換えると、対象、関係者という面から考えて、これまでの文集所収の碑誌や石刻書所収のもの、さらには伝世のものを含めた石刻史料に比して、これら新出墓誌は、より「遍在性」を有すると言いうことができるのである。つまり、過去に無数に作られ続けてきた墓誌のうちのどれが出土してくるかは、全くの偶然にすぎないということは、出土墓誌は、墓誌という集合からランダムに抽出されたサンプルであるということになるのであり（あくまでもこれは比喩で、清朝以来すでに開発が進んでしまっている地域か否かとか、現時点での開発の進行の違い、などによる差異が生じることは言うま

⁽²⁾ 本書のように石刻の出土事情を詳しく述べる文献として、筆者の知るものには、『済南歴代墓誌銘』（黄河出版社 可愛的済南叢書 2002）がある。

でもない)、少なくとも墓誌を残すことのできた社会集団については、史料が遍在してくれていることが期待できるのである。そして、墓誌については、墓碑で存在するような制度上の規制の存在を筆者は知らない。臨海の場合、一覧表を見ていただければわかるように、無官の者の墓誌が少なくないことから考えて、在地の士大夫層のかなり広い部分が、墓誌を残していたと考えていいのであり、それらの墓誌が、臨海という地域の範囲の中ではあっても、「遍在的」に我々の前に姿をあらわしてくれているのである。地域社会の指導層の断面が姿をあらわしていると言ってもいいかもしれない。

臨海の場合で、墓誌を残した人々についてもう少し具体的に見てみよう。社会的階層が高いグループとしては、『諸蕃志』の撰者趙汝适をはじめとする宗室とその夫人の墓誌4件(30~33)や、実質的な南宋の滅亡である臨安の陥落に際して、幼帝をともなうモンゴル軍に下った皇太后(理宗の皇后)謝氏が臨海の出身であり、その一族の墓誌が3件(42、43、44)、『宋史』に立伝されている人物またはその夫人ものが3件(1、2、3)含まれている。その一方で、本人は官を有していたことが確認できない人物またはその夫人のものが、26件と過半数にのぼるのである。後述するように文中に官を書さない場合もあるし、祖父、父、あるいは子、さらには夫人の尊属が官を有するものが多く、いわゆる「三代不仕」の問題とは直結しないが、こうした出土墓誌群が、地域社会における知識人(あるいは中下層士大夫)について考えるための具体例を提供してくれる史料群なのであることは、おわかりいただけるのではないだろうか。この問題に関連してさらに注目すべきことは、開発にともなう出土が多い故に、同一家族、とくに夫婦の墓誌が一緒に出現する場合が少なくないことで、『臨海墓誌集録』では、夫婦7組(3・4、7・8、31・32、34・35)、親子4組(18・19、19・35、34・36、50・51)が見出され⁽³⁾、夫婦と子供、先妻と継妻といった組み合わせもある。宋代の士大夫官僚の家とその継続性については、周藤吉之氏の『宋代官僚制と大土地所有』以来、戦後の我が国の宋代史学界でしばしば論じられてきたところであるが、これらの墓誌はそれらについての好史料といえよう。『臨海墓誌集録』所収の墓誌の対象になった人々やその「家」にかかわる問題については、別途文章を用意することになっている。

それとともに、新出史料としての魅力が墓誌にはある。少なくとも宋元以前の時代に関して、新たな典籍史料が紹介されることは絶えて久しい。韓国における『至正條格』の出現が研究者の関心を強くひくのは、その史料価値にあることは言うまでもないとして、やはり久々の「新」史料であるというところにあるであろう。それに対し、昨今の中国においては、経済開発や社会の改革開放の結果として、新たに紹介される石刻が決して少なくないことは、筆者が元代北京にかかわる石刻について作成した書誌にその一端を見ることができよう⁽⁴⁾。交通の進展や社会の変化でこれまで知られていなかった碑刻が「発見」されることは珍しい話ではなく、近年では日本の研究者によって紹介された例もあることは、これをお読みのみなさんならご存知であろう。しかし、出土石刻に比べれば、その数はずっと少ない。そして、出土石刻のうちには、

⁽³⁾ この他に、11、29、40は、夫妻のための墓誌である。

⁽⁴⁾ 森田「北京地区における元朝石刻の現況と文献」(科学研究費基盤研究B「碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究」報告書 2002)

一般的な碑記の類がないわけではないが⁽⁵⁾、その大多数が墓誌であることは言うまでもない。また、今後も「新出石刻」の多くを墓誌が占めるであろうことは、想像に難くない。とすれば、墓誌、とくに新出の墓誌についての史的な特性と限界について考えておくことは無駄ではないであろう。

しかしながら、宋元の新出墓誌については、唐代あるいはそれ以前の墓誌が洛陽を中心にこれまでに数千点が紹介されているのと、かなり状況を異にする。臨海一市でこれだけの墓誌の出土があることを考えれば、国家事業としておこなわれている『新中国出土墓誌』における宋元墓誌の掲載数は、あまりにも少ない⁽⁶⁾。そして、唐代の墓誌については、拓影、録文ともに各種の出版物があるが、宋元については、そうしたものを知らない。強いて言えば『北宋皇陵』であろうか。こうした史料状況にあるについては、そこになんらかの価値判断が存在するのであろう。出土数が多すぎるということがあるのかもしれないが、宋代以降の墓誌に対する文物としての評価が低いとも考えられる。さかのぼれば、伝統的な石刻学の中でも、宋元墓誌への関心はあまり高くなかったようで、清朝以来の石刻書の中でも、登載されている墓誌の数は決して多くない。たとえば、臨海を対象に含む、『兩浙金石志』（道光4年）では墓誌は4、『台州金石録』（民国3年）では13と、対象とする地域がより広いことを考えれば、いずれも本書と比べてかなり少ない。ちなみに『台州金石録』所載の南宋石刻は全部で85件である。たしかにダム建設や道路工事などの近代的工事による破壊の大規模化によって、近時に大量の出現があったということも背景にあるにはあろうが、前代により多くの墓誌が見出されていなかったとは考えづらい。後論するような墓誌の持つ史料としての限界、つまりは魅力の小ささや、墓室内に埋蔵されているということに由来する宗教的な感覚なども反映しているのかもしれない。

その一方で、本書や温州における『温州文管委蔵石攷』（温州區文物管理委員會編1961）の存在や、文物関係の規定からもわかるように、各行政単位の文物管理委員會レベルでは、当然のことながら、新出石刻について、採拓、記録がなされているはずであり、それへのアプローチが今後の課題となろう。日本に在る我々としてできることは、それぞれが関係を有する中国各地の單位からの現地情報を招来し、それを蓄積、共有していくことではないだろうか。なお、北京周辺の開発にともない、遼金の墓誌の出土もかなり増加している。遼については、『遼代石刻文』（向南著 河北教育出版社1995）が、かなりカバーしており、それをみても新出墓誌が少なくなく、典籍史料のけっして多くはない遼金時代史研究においては、新出墓誌の持つ情報への期待はさらに大きい。

さて、このように史料の特性に基づく利用の可能性への期待が存在する一方で、墓

⁽⁵⁾ 松田孝一「北京の元代石刻 ～その残り方～」(『13, 14世紀東アジア史料通信』1 2004)、森田「昌平訪碑記」(『13, 14世紀東アジア史料通信』5 2005)などで、そうした例が紹介されている。

⁽⁶⁾ 唐代に比して宋元の墓誌の数が少ないことは、すでに葉昌熾が『語石』において、「宋元声価、自不敵唐碑之重。然得唐碑易、得宋碑難」(卷2・宋元碑難得)とか、「宋墓誌新旧出土者、視唐誌不過十之一。元又不逮宋之半、佳刻絕少」(卷4・墓誌)と述べており、清朝時代からの現象であったようだ。また、中国における墓誌の整理出版については、任昉「集新出墓誌之大成 展傳統文化之精華—《新中国出土墓誌》整理工作的回顧與前瞻」(『中国文物報』2005年7月13日)参照。

誌史料には、墓誌史料なりの限界というものがある。これについても、確認しておく必要があるであろう。やはり、後掲の表を手がかりとする。

その1つは、文章の短さと類型化である。墓誌の文章が典型的であり、字数に比して含まれている情報の量が少ないことは、石刻史料を扱うものであれば誰でも経験するところであるが、『臨海墓誌集録』の多くを占め、筆者としては内容的に注目したい中下層士大夫家族にかかわる墓誌においては、とくにそうした問題が大きい。表に各墓誌の概算の字数を載せておいたが（この字数は本書が注記する墓誌の行数と行の字数を掛け合わせたもので、表敬のための改行などは反映されていないから、実数はこれより少ない）、それを見れば、1,000字を越えるものは、わずか2つ（3、49）であり、200字以下のものさえ少なくない。このように、本書所収の墓誌の字数は少なく、そのことは、当然のことながら与えてくれる情報量に反映する。本書に墓誌が収められている人物のうち、鹿愿の祖父鹿何、父鹿昌運の墓誌が『両浙金石志』の巻10、11、あるいは『台州金石録』の巻8、9に収められているが、それらを概算すると、約2,900字と1,300字で、いずれも『臨海墓誌集録』の墓誌と比べると長文である。何が朝奉郎、昌運が朝散郎と、れっきとした官品を有する人物であるから、当然といえば当然ではあるし、その故にこそ、『両浙金石志』が、鹿氏関係石刻のうちでこの2件のみを収録した可能性もある。もう一方の記述の類型性については、改めて言うまでもないであろう。このような史料からどれだけの情報が読み取れるのかと考えると、史料としてのこれらの墓誌にあまり関心が寄せられてこなかったとしても、いたし方のないことかもしれない。

また、石刻史料の持つ同時代性から生じる限界もある。すなわち、本人の履歴については当然のことながら完結しているが、夫や子、孫については、いまだ官途の途中である場合が少なくなく、墓誌の記述からだけで官僚としての彼らについては危険があるという問題である。これも本書から例を挙げるならば、父王望之の墓誌である3では「未仕」として登場する王鋁が、母の墓誌である4では朝奉郎として撰者になり、『両浙金石志』所収の子の王詮の墓誌では朝議大夫直秘閣太府卿となっている。当たり前のことであるが、墓誌に見える卑属の官品は、その人物の最終的なものではないわけで、もし3や4しか残っていなければ、我々は王鋁について、判断を誤ることになる。このことは官僚の家系問題を考えるための史料としての墓誌の利用に限界があることを示す。ただし、多くの地方志や石刻書の利用が容易になり、さらには記事の検索が可能なものが増加してきた現在では、この種の文献の題名的な部分の利用の利便性が拡大しており、人物調査のための環境は大きく変わりつつあるから、従前よりは状況はかなり前進してきているとは言える。

そして、石刻史料を取り扱うときにもう1つ注意すべきは、執筆者、丹書・篆額者というものの存在である。それをどのような人物に依頼するか、あるいはされるかということの中からも社会関係の一端が見出されること、また、知識人たちにとって、そうした営為をおこなうこともまた社会的活動の1つであり、“書く―書いてもらう”の関係への注目は石刻研究における重要な課題であることは、これまでも筆者は指摘してきたところである⁽⁷⁾。しかし、本書所収の墓誌の場合、「夫襄陽王奉世志」(5)、「孤

⁽⁷⁾ 森田『元代知識人と地域社会』（汲古書院 2004）第7章ほか参照。

子応龍泣血謹志」(13)、「孝男祖烈泣血百拜謹書」(35)、といったような表現がなされており、子や夫が誌文を記したとされているものが多い。一覧表では、「志者」という項目を設けて表示しているので参照していただきたい(表の空欄は不明もしくは第三者による撰文)。つまり、ここでは上で述べたような“依頼する—される”の関係が成立していない。このことをどう理解するのか。他者に依頼するだけの人脈や社会的つながり(当世風に言えばネットワーク)を持たないと理解するのか、墓誌の義例として、実際には執筆していなくてもこのような形をとることがあるのであろうか。依頼関係をめぐっては、むしろ「填諱」として名を挙げられている族外の人物について目を向けるべきかもしれない。また、上の例にも見られるように、こうした場合には官を称さないの、官僚としての地位の継続性について考える場合には注意が必要である。

なお、墓誌の義例に関わる問題として、『臨海墓誌集録』収録の墓誌には銘を有するものがないことも気になる。これは、墓誌の短さとも関係するかもしれない。墓誌を作った階層に起因するとか地域的な慣習の問題といった可能性はすぐ思い浮かぶが、はっきりした答を用意できていないわけではない。上に挙げた家族による撰文、どのような人に填諱を依頼するのかといったこと、そしてこの銘の有無など、撰誌にあたっての義例の問題抜きに墓誌を正しく利用することは難しい。これは墓誌に限らないことだが、石刻研究にあたっては、それぞれの石刻の種類に応じた義例についての基礎知識が必要になるにもかかわらず、我々の世代では、少なくとも私には、そういった方面の知識が、まったく欠けている。石刻研究が真に石刻研究となるには、そうした知識の蓄積もまた必要であろう。『石刻史料新編』には、金石類義例之属の書物があまり収録されていないのはたしかだが、他の叢書に所収の書物もあり、不勉強を恥じるしかない⁽⁸⁾。

本書所収の墓誌の多くを占めている在地の中下層士大夫の墓誌は、おそらく他の地域でも同様に出土しているはずであり、より多くの事例を収集、検討することが問題の解決には不可欠と考える。陝西や山西では地区単位での石刻史料集が刊行されていることは、よく知られているところだが、とくに江南については、文献が少ない。上にも書いたことであるが、本誌をお読みの方々に、こうした地域レベルの石刻史料についてご存知の方があれば、ぜひ情報をお寄せいただきたい。

(もりた けんじ 奈良大学)

本稿は、科学研究費特定領域研究A「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」A01-02「中国科举制度からみた寧波士人社会の形成と展開」(研究代表者近藤一成氏)の、平成17年度における成果の一部であり、2006年3月11日に東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所で開かれた、同研究班と遼金西夏史研究会との合同研究会において口頭発表したものである。当日参加された諸氏のご意見によって教示された箇所も少なくない。感謝申し上げます。内容的に関係が深いため、本誌に発表させていただくこととした。

⁽⁸⁾ ちなみに、『金石三例』は国学基本叢書に収められているし、四庫全書にも義例の書が収められている。

臨海出土墓誌所収墓誌一覧

	臨海墓誌題名	作成年	本人・夫官品	字数	志者	発見状況	原本頁と参照事項
1	曹勛妻王氏墓志	紹興24/1154	保信軍承宣使	91	夫	出文革時張家渡鎮大畝村被村民發掘, 現尚該處	2p, 宋史379
2	葉崇礼墓志銘	不明	不明			墓在城南鄉東山, 此残石在附近一磚瓦窯	3p, 残石, 宋史378
3	王之望墓志	乾道 7 /1171	資政殿大学士開國伯	2419	子	2000年徵集于小溪鄉白岩畝	4p, 宋史372
4	王之望妾□氏墳志	不明	同上	255	子	1990年訪見于小溪鄉廟前村項文喜家	9p, 撰磚泥時摩滅, 3では未仕の銘が朝奉郎
5	王奉世妻盧氏墳志	紹定 2 /1229	なし	244	夫	出小溪鄉白岩畝村, 原藏農民周遠長家	10p
6	王鼎臣墓志	開慶元/1259	なし	286	兄	原藏白岩畝農民潘雨通家	11p, 3の曾孫
7	余煥墓志	慶元 6 /1200	校尉(買官?)	522	子	其墓初1993年3月被盜, 志石移藏于橋頭村余氏後裔余國堅家	12p
8	余煥妻何氏墓志	紹熙 4 /1193	不明	208		其墓初1993年3月被盜, 志石移藏于橋頭村余氏後裔余國堅家	14p
9	謝坦然妻宋氏墓志	嘉泰 2 /1202	承事郎	63		城南鄉大嶺頭	15p
10	謝輝墓志	嘉泰 4 /1204	將仕郎(姚興の恩)	475	子	1990年徵于汛橋鎮光明村村委會	16p, 深甫とは6代前に別れる
11	王玠暨妻范氏墳志	嘉泰 4 /1204	なし	156	子	2000年出土于臨海西鄉留賢新堂山(因炸岩暴露)	18p, 玉象祖が叔父
12	王玠繼室張氏墳志	嘉泰 4 /1204	なし	320	子	同上	19p
13	陳椿墓志	開禧元/1205	なし	408	子	志石原在小溪鄉張家畝王來福家, 被作為柱礎基石, 今年拆屋重建, 重新出土	20p
14	朱增墳志	開禧 2 /1206	なし	190	子	1989年村民蔣通広在此控坡平整屋基, 發現朱墓	22p
15	朱增妻范氏墳志	紹定 2 /1229	なし	180	子	1989年村民蔣通広在此控坡平整屋基, 發現朱墓	23p, 11の11
16	姜鄴墳志	嘉定 5 /1212	文林郎(郊祀恩)	476	子	原藏墩頭農民謝庭壽家	24p
17	謝開墓志	嘉定 6 /1213	なし	550	子	原置于田洋村俞良桂家後門口	26p
18	応訥墳記	嘉定 6 /1213	なし(無成)	384		出嶺外鄉	28p, 篆額には進士だが, 本文では「無成」, 19宏甫の子
19	応宏甫繼妻牟氏墳志	嘉定以降	泰州助教		子	出臨海大田鎮柘溪頭	29p, 娘は35で, 34鹿愿の妻
20	(佚名) 墳志	庚寅	不明			訪見于城南特産場一小溪辺	30p, 断片
21	徐邦用墓志	嘉定 8 /1215	監衛岳(恩)	336	子	1980年朱万榮建房掘墓時發現, 兩年後墳墓時始見墓誌	31p
22	陳容墳志	嘉定10/1217	待補国学	234	子	原藏田洋村農民徐濟敏家	33p, 進士(篆額)
23	陳容墓志銘	嘉定10/1217	待補国学	432		原藏田川村農民王家善家	34p, こちらには進士の表現なし
24	陶驥墳志	嘉定13/1220	処士	192	子	1980年代從箬溪山掘得	36p
25	陶驥妻包氏墳志	端平元/1234	文中に夫は進士とあり	260	婿	1980年代從箬溪山掘得	37p
26	揚彦通墳志	嘉定14/1221	辟駐泊	500		1970年代出城東鄉蔡嶺	38p
27	揚彦通妻林氏墓志	嘉定11/1218		210		同上	40p
28	陳鉛妻詹氏墳志	宝慶 2 /1226	辟幕府	589	侄婿	原藏小溪鄉白岩畝村潘汝龍家	41p
29	胡炳暨妻黃氏墳志	紹定 3 /1230?	なし	494	子	1991年出土于大田区下安鄉泄下莊山頭(農民發見)	43p
30	趙汝適墳志	宝慶 4 /1228?	宗室	756	子	出嶺外鄉嶺外村北, 原藏錢元璋家	45p
31	趙彦熙墳志	端平元/1234	宗室	408	子	出溪口鄉馬畝, 原藏徐伝根家	47p
32	趙彦熙妻陶氏墓志	淳祐12/1252	宗室	330	子	出溪口鄉馬畝, 原藏農民葛岳運家	48p
33	趙汝愈妻楊氏墓志銘	?	宗室			徵集訪見于城南特産場盧秀義家	49p, 下截右面欠
34	鹿愿墳志	嘉熙元/1237	奉議郎浦城知果	220	子	出于白竹畝里, 文革時生產隊平整晒場發現二志	51p
35	鹿愿妻応次昭墳志	嘉熙元/1237		396	子	出于白竹畝里, 文革時生產隊平整晒場發現二志	52p, 19応氏の娘
36	鹿祖烈墳記	淳祐 9 /1249	なし(不中)	336	子	出嶺外鄉, 原藏西溪鹿氏後裔鹿洪洲家	54p, 34鹿愿の子, 妻は「進士」の女
37	李灼然墓志	淳祐 4 /1244	進士(慶元2), 從事郎	192?	弟	文革後期出土于椒江市楊司鄉謝楊村	55p, 断片

臨海墓志題名	作成年	本人・夫官品	字数	志者	発見状況	原本頁と参照事項
38 余璿妻何氏墳志	淳祐 5 /1245	なし	220	夫	出小芝郷虎柵頭,70年代修水庫時發現,原藏余匡飛家	56p
39 董亨復墳志	淳祐 6 /1246	進士(嘉定7),朝奉大夫	760	子	2001年邵家渡東山發現	57p
40 周希祖暨妻任氏墳志	淳祐 7 /1247	妣士(篆額)	621	子	1970年代上蔡瀑布山麓小水電站工地上發現	59p
41 陳文広墳志	淳祐11/1251	なし(辞恩)	368	子	出嶺外郷	61p
42 謝奕久妻吳氏墳志	宝祐 2 /1254?	不明	192	夫	出大田鎮下西山	62p, 理宗謝皇后の一族
43 謝奕進生母蔡氏墓志	宝祐 3 /1255?	保康節度使	240	子	原在西郊郷溪頭坊李方賢家	63p, 理宗謝皇后の一族
44 謝渠伯重葬墓志	庚辰 (1280?)	不明	252	族内	志原在郷(西郊郷)衛生院,被用作切藥刀座	64p, 断片, 理宗謝皇后の一族
45 章德妻繆洞真墓志	宝祐 2 /1254	不明	570	契任	1984年初浙江省第六地質隊在西郊郷車門橋建房時發現	65p
46 揚輝墳志	宝祐 2 /1254	なし	966	子	1985年6月發現于双港郷前園後塘王克田家	67p
47 張皓妻何氏墳志	宝祐 4 /1256	なし	160	夫	1987年出土于椒江市鳳凰山山麓	69p
48 □尚綱先生妻李氏墳志	景定 4 /1263	不明			1983年溪路郷文墨村殿山脚發現,原藏塔湾姚芝蓮家	70p, 志石多塊, 下欠
49 鄭雄飛歳月記	景定 5 /1264	進士(端平2), 通議大夫	2220	子	出城南郷	71p, 紹興知府, 戸部侍郎
50 黃之奇墳志	咸淳 5 /1269	なし	475	子	2001年12月出土于連盤郷雉溪壩埠黃泥山頭村, 因村內拓建道路發現	75p, 51処恭の父
51 黃処恭墳志	至元28/1291 (咸淳 8 卒)	なし	580	子	70年代出土于連盤郷肯埠黃泥山頭村安山, 石被一村民当作姜窖蓋板	77p, 50之奇の子
52 李舜瑛妻董氏墓志	咸淳 7 /1271	なし	60	夫	1986年10月17日機械廠于廠後山坡上拓建廠房時, 在地下 2 m 处掘得	79p
53 章飛卿墳志	咸淳 8 /1272	進士, 不明		子	1985年2月從大田鎮双山徵集	80p, 下截断失
54 杜文甫墳志	至元29/1292?	奉議郎?		子	70年代出于大田郷方家弄, 出土後層層剥裂	81p, 残3/1

* 誌名は本書の表記による

** 表の「なし」は、名ありて官・職の記事なし、「不明」は名前なし

*** 地名の臨海市は略